

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380683

研究課題名(和文) ラオス農村における水田漁撈の村落社会学的研究

研究課題名(英文) A study of paddy field fishing in rural Laos from sociological perspective

研究代表者

藤村 美穂 (Fujimura, Miho)

佐賀大学・農学部・准教授

研究者番号：60301355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近代における市場経済化や環境変容への対処、それを方向付ける社会的要因について考えるための視点を考察する一環として、ラオス南部の水田漁撈など複合的な生業活動が行われていた空間に注目して所有や利用管理の実態とその変化、管理の単位についてのデータを収集した。そしてこれまでの調査結果をあわせてその変化を分析した。結果として、米と魚を基本とした食生活やそれを維持するための土地利用に大きな変化はみられていないことがわかった。そして、その背景にある社会経済的状況や、社会関係を考察した。

研究成果の概要(英文)： In this study we paid attention to the the multiple land use ; rice paddy fishery in southern Laos, and collected data about the real situations of the property and social management of these area. And we analyzed how those were changing under increasing market economy.

We found that environmental change, especially water related environment, was felt by the villagers. However any big change wasn't seen on the eating habits and land use. It would be considered as the factors; unstableness of the cash income, folkways related to rice paddy fishery, social relation based on a rice farming.

研究分野：農村社会学

キーワード：水田漁撈 ラオス 資源管理 村落

### 1. 研究開始当初の背景

ラオスに関して 2006 年より、調査を続けてきた。その背景にある問題関心は、「伝統的な土地利用における市場経済化や環境変容への対処、それを方向付ける社会・経済的要因について考えるための視点をつくること」、「土地利用(とくに複合的な土地利用が行われている空間を中心に)との関連性のなかでアジアの農山村における日本農村の固有性について考えること」である。

ラオスは GDP の約半分が農業、就業人口の約 8 割が農業人口という農業国であり、とくに都市圏から離れた地域では、自給的な農業が中心であった。

しかしながら、近年は、農業基盤だけではなく道路・橋梁・電気網などのインフラ整備も急速に進んでいる。それと併行して、外国資本によるアグリビジネスへの投資が活性化しており、ゴム、コーヒー、サトウキビ等を生産するためのプランテーション産業が飛躍的に伸びている。このような変化は、これまで自給的生産に頼らざるを得なかった地方農村住民にとっては、居住しながらして現金収入が得られる機会が増えたことを意味し、農業の近代化やそれともなう生産性増加を押し進める契機にもなる。その一方で、水利秩序の変化や価値観の変化、化学肥料や農薬、飲料水販売の開始などともなっており、これまで行われてきた(農業に付随した)地域資源の利用形態も大きく変容する可能性がある。

本研究は、ラオス南部アタプー県の 0y 族が生活する水田稲作農村を事例としてとりあげている。この村をとりあげたのは、前述のような急激な変化にさらされる以前から調査を開始していたこと、山麓に位置し、諸資源を利用しつつ稲作を基盤とした強い社会組織を形成している点や土地に関する信仰など日本の農村との共通点もあり、比較的な視点をもって事例を見ることができるところである。

### 2. 研究の目的

以上のような関心を背景にした本研究の今期間の目的は、特に、水田漁撈など、複合的な生業活動が行われていた空間に注目することによって、水田や周辺の土地をめぐる所有や利用管理の実態とその変化、管理の単位、水田をめぐる社会関係についてのデータを収集し、その変化を分析することにある。

### 3. 研究の方法

まず、2014 年夏に、アジア農村社会学会にて事例報告を行い、調査の方向性についてもそれをふまえて見直しを行った。また、現地連携研究者(国立公衆衛生研究所研究員)からの情報提供により、社会的弱者となりつつある高齢者にも焦点をあてた資料収集が必要なことを認識した。

以上をふまえ、調査は大きく 2 つに分けて

行った。ひとつは、①すでに入手した資料(現地語の資料など)の整理と分析、そして、本期間の目的に沿ったあらたなデータの収集および分析である。

①については、2014 年度から 2016 年度にかけて、「0y の歴史と社会慣習」を記したラオス語での記録の翻訳および資料の整理を行った。また、同じくラオス語で記された村落単位でのセンサス(2006 年、2011 年、2015 年)の整理を行った。

については、2015 年度は、雨期(9 月)に調査を行い、調査村における基礎データ(世帯状況)の更新を行うとともに、特に米の栽培についての聞き取り、および村内全小学生を中心とした食生活の調査を行った。また、近隣の村(他の 0y 族の村)についての米栽培の情報を入手した。水田利用に大きくかわる米の品種については、伝統的品種とハイブリッド米の栽培方法の違い、入手方法、移行時期、移行理由などについての聞き取りとともに、数世帯への調査によって農薬や肥料の使用などについての傾向を把握した。2016 年度は、乾季(3 月)に調査を行い、調査村にて、水田や養殖池の相続と世帯内での利用者についての調査を行った。また、家族の役割分担や食事について、プランテーションへの出稼ぎに出ていない高齢者を対象に調査を行った。

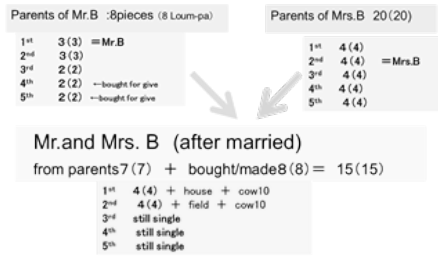
また、調査地の農業構造やアタプー県の農業・土地政策に影響を与える要因として、ラオス南部で大規模なプランテーション農業を展開し、それともなう労働移入も増大させつつあるベトナムの農業構造や農産物に対する価値観などについての分析も行った。

### 4. 研究成果

(1) 社会構造と土地利用に関する研究成果  
調査対象村の近隣にあるラニャオ村(同じ 0y 族の村)の古老が記した、0y 族の歴史と社会慣習の解説、および補足的な聞き取り調査から、0y はインドシナ半島の多くの山岳少数民族と同様、中国南部から移動してきたという伝承をもち、さらに度重なる戦争(タイとの戦争やベトナム戦争等)を避けて集落の位置は変えつつも、古くから水田漁撈を行っていたことが明らかになった。また、聞き取りにより、水利や水田漁撈のシステムも少なくとも「7 世代前」にはすでに存在していたとされることがわかった。しかし、長い歴史の中で移動してきたと記された諸地方には 0y 特有の水田漁撈の様式はみられず、アタプー県においても 0y の村のみにみられるのであるが、記録には水田漁撈の起源がわかる記載はなかった。

社会経済状況の把握のため、2006 年からの世帯調査センサスを入手し、世帯を同定する作業も行っているが、この作業は困難を極めている。その背景として、0y が姓をもたないこと、呼名と本名を使い分けており、さらに

ラオス文字で表現しにくい名前も多いため正確に記録することが難しいこと、親と結婚後の子供の同居形態に決まった規則がみられないことなどがある。ただし、これらの事実は、村の社会構造や家族構造を知る上では重要な情報である。



センサスの分析作業を通して、これらの他にも、水田や家畜などの相続が均分相続であること（図は水田と水田内幼魚装置 = カッコ内 = の相続の事例）村内のグループは居住地ではなく出自によって決定されるなど、社会構造に関する情報を得ることができた。また、村落全体の財産として、共有の水田や養殖池のほかに、米蔵を管理していることも明らかになった。

### (2) 複合的な土地利用としての水田漁撈

水田の利用調査の一環として稲の種類や播種時期、肥料、水田漁撈との関係などについての世帯調査からは、プランテーション農場でのパートタイム労働の導入に伴い、栽培時期が短いハイブリッド米を選択する傾向も出てきたが、殺虫剤の利用は、経費がかかるという理由や健康への配慮から一部にとどまっていることがあきらかになった。これについては、近隣の村での調査結果があるため、比較分析を行う予定である。

また、小中学生や高齢者のいる世帯を対象に行った食事アイテム調査からは、現金収入が増えた後も肉の消費はほとんど増加せず、水田に水がない乾季でさえ、米と魚中心の食事であること、その入手先として水田からの自給が依然として重要な役割を果たしていることが明らかになった。例えば高齢者が属する 51 世帯の乾季の調査において、一日のうち一度でも肉を食した世帯は 13%であったのに対して、魚は 90%の世帯、カエルは 25%の世帯が食べていた。その魚やカエルの多くは水田や水路から得られたものであり、下表で示すように、高齢者 51 世帯の調査からは、村内にある水田からの魚が、現金収入が得られない高齢者にとって重要な食糧源となっていることもよくわかる。

高齢者の米と魚の入手先				
	米	魚	肉	不足時
自分たちで栽培・捕獲	6	11	0	-
同居家族(栽培・捕獲)	41	34	0	-
同じ村の子や孫(栽培・捕獲)	2	4	0	-
自分たちで(購入・交換)	0	1	46	43
子や孫が(購入・交換)	2	2	5	-
行政から支給	0	0	0	-
近所の人・友人にもらう	1	0	0	0
食べない	-	-	-	0
木の実などの採集	-	-	-	0
子や孫にもらう	-	-	-	6
魚や貝を自分で採集	-	-	-	3
計	52	52	52	52

(2017年3月、複数回答/51世帯)

このように、調査村においては、乾季の水田漁撈を可能とする独自の装置（ラオス語で *Loum-pa*, *Oy* 語で *Tra-bang*）が、市場にアクセスできない世帯や現金収入の少ない世帯にとっては重要な意味をもっていることから、村全体としても水田漁撈を守るようとする意識が強く維持されていた。雨季と乾季の魚についての知識についても、フォーカスグループディスカッションにより聞き取りを行った。その結果、水路や水田に生息する魚や貝を、人によって異なるが数十種類以上は識別し、季節による増減についても詳細に把握していることがわかった。

懸念されるのは、近年では、水不足と洪水を繰り返すという、水問題が深刻になりつつあることで、村人はその理由としてプランテーション（さとうきび）企業による川の水のポンプアップ、森林の減少をあげている。また、放牧や木材・薪の入手先であった平地林や川沿いの湿地は、外資によるプランテーション農場の建設、新たな水田の開墾のために減少していた。

### (3) 内外における研究の意義

社会的弱者である高齢者を中心とした調査は 2017 年 3 月に行ったため分析途中であるが、現段階までの成果は、ラオスのフードセキュリティ政策や農村生活研究にたいしていくつかの示唆を与えるとともに、村落研究の一環としての発見や今後の研究課題を見出すことにつながっている。

調査地において現在直面しつつある課題は、雇用労働に赴くことが不可能な乳幼児のいる世帯や高齢者が経済的な社会的弱者になりつつあるということである。乳幼児にたいしては比較的行政的な支援があるが、高齢者については行政ばかりか国際団体からの援助もない。健康状態や栄養状態の改善などにより、人口の高齢化が予測されるなか、今後、少なくとも当面のあいだは、*Oy* 族の水田漁撈に象徴されるような複合生業を維持する環境条件の維持が、社会的弱者のフードセキュリティを考えるうえでは、重要であるといえる。

調査をすすめるなかで、当初の予想とは異なり、商品経済の導入後も、電化製品や電話やバイクの普及がみられた一方で、農薬や化学肥料の利用や食生活の変化、社会組織の変容はそれほど大きくないことがわかった。

その理由については、現金収入源であるプランテーション農場での雇用が、収入は大きくても不安定であり体力を必要とすることに加え、電気代や飲料水代、ガソリン代などの新たな支出が増えたことなどから、既存の食糧確保手段を維持し続けようとする意識が働いているためだと考えられる。さらに、食の嗜好が肉よりも魚と米を基盤にしている（自分たちは魚を耐える民族だというアイデンティティをもっている）こともその一つであろう。

このように、米と魚をセットでコミュニティの共有財産として維持できるシステムを保持していることは、コミュニティの自治や福祉を考えるうえでも重要である

一方、土地とのかかわりという側面からみると、調査村は、日本の多くのコミュニティとは異なって周辺の森や川などに対する領域意識は曖昧であることがわかった。現在、死亡率の低下などによる人口増加（世帯増加）とそれに伴う土地不足の問題をいかに解決してゆくかが大きな課題として意識されつつある。インドシナ半島の多くの農村がかかえてきたこの問題に対して、このような社会システムをもったOy族がどのように対処しようとしており、その過程でどのような問題と直面しているのかについて、今後、データを整理するとともにまとめていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

①藤村美穂、2015、“農的自然”に流れる時間、環境社会学研究 21、56-73

Miho Fujimura, Tsukasa Inaoka, 2015, Paddy field fishing as self-sufficiency system in southern Laos-A case study of paddy field aquaculture system of the Oy, Asian Rural Sociological -2、219-225

辻一成、2015、ベトナム農業のグローバル化対応 - 担い手政策の変化とその課題を中心に、食農資源経済研究 67(1)、27-36

辻一成、2014、ベトナムにおける経済成長と食料・農産物市場 - 食料消費構造変化の分析を中心に -、農業市場研究 28、26-35

〔学会発表〕(計 3 件)

① Miho Fujimura, Tsukasa Inaoka, Chanthaly Luangphaxay  
学会等名: National Health research forum  
発表場所: Savannakhet, Laos  
年月日: 2016-10-28

M. Fujimura, T. Inaoka, K. Chanthakhoummane, C. Luangphaxay, K. Sengngam  
Paddy field fishing as food security system in southern Laos  
学会等名: National Health research forum  
発表場所: Savannakhet, Laos  
年月日: 2014-10-15

Miho Fujimura, Tsukasa Inaoka  
Paddy field fishing as self-sufficiency system in southern Laos-A case study of paddy field aquaculture system of the Oy  
学会名: The 5th International Conference of

the Asian Rural Sociological Association

発表場所: Vientiane, Laos

年月日: 2014-09-02 - 09-05

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村 美穂 (Fujimura Miho)  
佐賀大学・農学部・准教授  
研究者番号: 60301355

(2) 研究分担者

稲岡 司 (Inaoka Tsukasa)  
佐賀大学・農学部・教授  
研究者番号: 60176386

(3) 連携研究者

辻 一成 (Tsuji Kazunari)  
佐賀大学・農学部・准教授  
研究者番号: 00352518

(4) 研究協力者

辻 貴志 (Tsuji Takashi)  
佐賀大学・農学部・研究員  
研究者番号: 30507108

牧野 厚史 (Atsushi Makino)

熊本大学・文学部・教授  
研究者番号: 10359268